様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：４５３０９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７５０３５８

研究課題名（和文）保育所保育における「かみつき」行動の実態と要因の解明

研究課題名（英文）Examining States and Factors of Biting in Nursery School

研究代表者
中川　智之（NAKAGAWA, Tomoyuki）

川崎医療短期大学・医療保育科・准教授

研究者番号：５０４６２０４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、保育所保育における「かみつき」行動の実態と要因に関する検討を行った。具体的には、その一般的傾向を明らかにするために簡易な質問紙を作成し、広範囲における調査を実施した。また、実際の「かみつき」行動に関する記録を分析するとともに、気温・湿度・気圧との関連について検討した。調査の結果、(1)10～11時及び16～17時に多く発生する、(2)月齢16ヶ月～24ヶ月前後に多く見られる、(3)男児に多く見られ、長く続く傾向がある、(4)気温・湿度・気圧の影響を受けている可能性がある、(5)月曜日に発生する可能性が高い、(6)活発に友達と関わって遊ぶ子が受けやすい、などの傾向を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examined the actual states and factors of Biting in the nursery school. Specifically, the author made the simple questionnaire to enable the investigation in the wide area, and investigated the general tendency of Biting in the nursery school. In addition, the author analyzed the records relating to the Biting in a nursery school, and examined the relationship with the temperature, the humidity, the atmospheric pressure. It was suggested that, (1) Biting in the nursery school is frequent around 10:00-11:00 and 16:00-17:00, (2) it is frequent around age of the month from 16 months to 24 months, (3) it is frequent in boys, and the Biting of boys tend to follow long than the Biting of girls, (4) it may be affected by temperature, the humidity, the atmospheric pressure, (5) it is at increased risk for occurring on Monday, (6) the child who associate actively with friends have high risk to be bitten.

研究分野：保育学

キーワード：「かみつき」行動　保育所保育

１．研究開始当初の背景

近年、待機児童の解消に向けた定員の弾力化運用における受入れや子ども子育て支援新制度の導入が間近にせまり、保育施設での生活環境が変化しつつある。また、様々な価値観をもつ保護者の増加と地域の繋がりの希薄化から、保護者への適切な支援や対応に多大な労力が必要とされるようになっている。このような状況の中、3 歳未満児の保育所利用児は増加の一途をたどり、保育所保育における子どもの「かみつき」行動は、従来以上に保護者を巻き込む形で深刻化し、保護者間のトラブルにより保育所保育を利用できなくなる子どもや保護者も現れている（西川ら，2004）。

子どもの「かみつき」行動は、子どもの言葉の未熟さによる人間関係上のストレスによるものとこれまでの研究や保育士の経験から考えられているが、原因不明の「かみつき」行動が数多く報告されるなど、現在のところその実態はまだ詳細に明らかにされているとは言えない。そのため保育士が保護者に対し、子どもの「かみつき」行動について説明し理解を得る際に、客観的に提示できる資料が少なく、子どもを見守りその育ちを支える環境を作り出すことが難しい状況にある。

アメリカにおいても、保育施設を利用する低年齢児が増加する中で、かみつきの問題が顕在化、深刻化し、幾つかの調査が為されるようになったが、その数はまだ十分とは言えない（中村ら，2000）。アメリカでは被害児や被害の状況に関心が向く傾向があり、発生頻度は午前中に高く、期間的には年度末と年度初めに数多く発生していることが報告されている。我が国においても藤岡ら（1994）や、西川ら（2004）による調査が為されている。しかしながら、これらの調査報告の示すものは同一ではない。例えば発生頻度に関して、藤岡らの調査では、1991 年には午前中に「かみつき」の発生のピークがあるが、1997 年の調査では午前中と夕方に２つのピークが報告されている。これに対し、2002・2003 年の西川の調査では、昼食の片付けからお昼寝への切り替えの時間帯に集中してかみつきが見られると報告されている。また、これらの調査から、原因の分からない「かみつき」行動が多数存在することも報告されている。現在、研究機運が高まってきており、より詳細な調査が期待されている。

２．研究の目的

本研究の目的は、保育所保育における「かみつき」行動の実態と要因を解明し、保育所保育の質的向上を図る際の基盤資料を提供することである。

具体的には、広範な地域においてアンケート調査を実施し、保育所保育における「かみつき」行動の実態について、その一般的傾向を明らかにすることである。他方、特定の保育所における「かみつき」行動について調査するとともに、気温・湿度・気圧の環境の条件と、「かみつき」行動との関連を検討する。

３．研究の方法

平成 26 年より 28 年までの間に実施した研究内容として、保育所保育における「かみつき」行動の実態について、その一般的傾向を明らかにするために、保育所の施設長と連携しながら、広範囲における調査を可能とする回答の簡易な質問紙を作成した。完成した質問紙を用いて、県内全域の保育所を対象とした質問紙調査を実施した。

他方、Ａ市内の私立Ｂ保育所において、気温・湿度・気圧と、子どもの「かみつき」行動との関連について調査した。具体的には、データロガーを用いて、0 歳児～2 歳児各クラスと、日の当たらない保育所の屋外の気温・湿度・気圧を 5 分おきに観測した。観測した 8 時～18 時における気温･湿度･気圧と、子どもの「かみつき」行動に関する記録とを照合し、その関連について検討した。

また、保護者への連絡や保育士間の引き継ぎのために残されていた、「かみつき」行動を受けた子ども（以下、「受動児」と記載する）に関する情報と、当該クラスを担当する保育士個人が、「かみつき」行動をした子ども（以下、「行動児」と記載する）と受動児に関する情報を合わせてメモに残していた個人記録を分析し、特定の子ども集団における「かみつき」行動の 1 年間の状況について検討した。

なお、本研究は、平成 26 年に川崎医療短期大学倫理委員会の承認を受けている。

４．研究成果

(1) 保育所保育における「かみつき」行動の一般的傾向

県内全域の保育所を対象とした質問紙調査の結果、1 年の間に、0 歳児クラス～2 歳児クラスに所属する子どもの内、約 2 割が「かみつき」行動を経験する（行動児となる）ことが明らかとなった。また、約 3 割の子どもが受動児となる経験をしていた。「かみつき」行動の多く見られるクラスでは、そのクラスに所属する全員が受動児となっているクラスも存在した。行動児が、所属する子どもの 7 割を超えるクラスも存在した。

本調査においては、「かみつき」行動が多く見られる時間帯として、2 つのピークが見られた。最も多い時間帯は 9 時～11 時（特に 10 時～11 時）の時間帯で、次いで 15 時～17 時（特に 16 時～17 時）にもう 1 つのピークが見られた。本調査の結果は、藤岡らの 1997 年の調査に近いものであった。「かみつき」行動は、活動中に多く見られることが示唆された。

直近の 2 ヶ月に見られた「かみつき」行動について、行動児を担当する保育士にその原因・要因と考えているものを尋ねたところ、

①ものの取り合い、②場所の取り合い、③自分の思いが通らないイライラ、④たまたま口の位置にきたため、という順に回答が多かった。その原因・要因を不明と回答するものは、1 割も存在せず、先行研究とは異なる結果となった。

直近の 2 ヶ月に見られた「かみつき」行動について、行動児の月齢との関連を検討した結果、特に「かみつき」行動の多い月齢は、16 ヶ月～24 ヶ月であった。その月齢には男女差が存在し、女児の方が早く「かみつき」行動が減少する傾向が示唆された。直近の 2 ヶ月に見られた「かみつき」行動の行動児数についても、男児が女児の約 1.5 倍存在した。当該年度に行動児として「かみつき」行動を経験した子どもの数についても、女児に比べて男児が多かった。

(2) 気温・湿度・気圧と「かみつき」行動との関連

子どもの「かみつき」行動と、行動が生じた時間の気温・湿度・気圧の観測値及び波形（前後の時間との変化）について、「かみつき」行動が生じやすい気温・湿度・気圧は存在するのか確認したが、かみつき行動が発生した時間の気温・湿度・気圧には、明確な特徴は見られなかった。また、発生時間の前後、あるいはその日の観測値の波形に明確な特徴は見られなかった。

しかしながら、1 日の平均気温・平均湿度・平均気圧と「かみつき」行動との関連を検討した結果、それらの間には若干の関係性が示唆された。具体的には、気温・湿度・気圧のそれぞれの 1 日の平均値により高群（上位 3 分の 1）・中群（中位 3 分の 1）・低群（下位 3 分の 1）に分類し、各クラスにおけるかみつき行動発生日との関連を検討した。また、その平均値の前日からの変化（前日から高くなった日が高群）、及び翌日への変化（翌日にかけて高くなった日が高群）と、かみつき行動との関連についても検討した。その際、屋外で観測した気温・湿度・気圧の平均値については、0～2 歳児クラスの子どもにかみつき行動が見られた日を発生日として、その関連を検討した。

気温に注目すると、1 歳児クラスでは高群～低群の差が見られなかった。2 歳児クラスでは高群に最も発生日が多く、低群にかけてその数は少なくなっていた。気温の高群～低群は、夏から冬にかけての大まかな季節変化を表していると考えられ、この結果は、発達に伴うかみつき行動の減少を示していると考えられる。また、1 歳児クラスにおいては、前日から気温が上昇した日に、多く発生する傾向があった。

湿度に注目すると、1 歳児クラスでは、高群及び低群に、かみつき行動の発生日が若干多かった。これに対し、2 歳児クラスあるいは屋外では、中群が最も多かった。また、0 歳児から 2 歳児において、翌日に湿度が低下する日に、発生日が多い傾向が見られた。

気圧に注目すると、2 歳児クラスでは気圧の低い日にかみつき行動が多く見られた。1 歳児クラスでは、前日あるいは翌日との気圧差が大きい日に発生日が多かった。

これらの結果から、1 歳児においては、前日あるいは翌日との、気温差・湿度差・気圧差の影響が示唆された。他方、2 歳児においては、当日の気圧が低い日に、「かみつき」行動が多く見られる可能性が示唆された。

(3) 1 歳児クラスにおける「かみつき」行動の実証的検討

1 歳児クラスにおける 1 年間の「かみつき」行動について検討した結果、当該クラスにおける「かみつき」行動は、便宜的に、1 年間 3 ヶ月毎 4 つの期間に区分すると、年度初め（4～7 月）と年度末（1～3 月）に比べ、年度途中（7～9 月・10～12 月）の方が「かみつき」行動の発生数が多かった。

当該 1 歳児クラスにおいては、月曜日から金曜日まで、平均すると 1 日あたり 1 回以上の「かみつき」行動が見られた。「かみつき」行動が最も多く見られたのは月曜日であり、月曜日に開所していた日の約 7 割において、その行動は確認された。1 日あたりの平均回数は、週末である金曜日と比較して、約 1.5 倍多く「かみつき」行動が発生していた。月曜日に次いで「かみつき」行動が多いのは、火曜日と木曜日であり、逆に、少ないのは、水曜日と金曜日であった。

「かみつき」行動の発生状況は、概ね、週の始まりに多く見られ、週末にかけて減少する傾向があると言えよう。土曜日・日曜日を過ごす家庭での生活と、保育所の生活との相違は、家庭と保育所における生活リズムのズレ、子ども同士の間のリズムのズレ、子どもと保育士の間のリズムのズレ等、複数のズレの存在が指摘できる。それらのズレの影響が大きいと考えられる休日後の保育については、率先して子どもの生活リズムを調整しようとする保育士の意識が重要となろう。

当該 1 歳児クラスにおいては、1 年の間に「かみつき」行動を受けなかった子どもは 1 名もいなかった。また、年間を通じて 10 回以上「かみつき」行動を受けた子どもは、年度途中に退所あるいは加入した子どもを含めて 7 割以上存在した。

行動児の月齢と「かみつき」行動との関連を検討した結果、「かみつき」行動の多くは、2 歳の誕生日を迎える 23･24 ヶ月に特に多く、月齢 22～26 ヶ月に多数生じていた。本研究における質問紙調査及び先行研究においても同様の結果は示されているものの、それらは調査期間の関係から、異なる子どもに関する調査結果を組み合わせて導き出されたも

のである。本研究における１年間を通じた記録の分析は、同一の子どもの月齢による「かみつき」行動の変化を明示するものであり、これまでの研究・調査の成果を裏付けることができるものと言える。

１年間を通して、10 回以上「かみつき」行動が見られた行動児はクラスの約 4 割存在した。特に行動が顕著に見られた子ども１人の記録は、記録の約 4 割を占めており、行動児となった回数の多い上位 4 名で、クラスの 8 割を占めていた。「かみつき」行動が顕著な子どもがいるかどうかで、クラスにおける「かみつき」行動の発生数が大きく影響を受けると言えよう。

他方、受動児となることが多かった子どもは、4 名存在した。この 4 名は、元気な子どもたちで、よく保育士の周囲に集まり一緒に活発に遊ぶことが多い子どもであった。逆に、「かみつき」行動を受けることが少なかったのは、大人しい性格で、友達との関わりの少ない子どもであった。また、受動児となることが多かった子どもの内、1 名は行動児となることも多かったが、他の 3 名は、「かみつき」行動を示すことは少なかった。しかしながら、この 3 名についてもトラブルが生じることは多く、その際には、相手をたたくなどの身体的行動を取っていた。

子ども同士の関わりが多くなるほど、「かみつき」行動を含めたトラブル時の身体的行動は増加すると言えよう。森本ら（2012）は、幾つかの保育所でのトラブルの発生率や保育環境の比較を通して、保育室の面積や子ども１人あたりの面積が直接的にトラブルの発生率に影響を与えるわけでないことを示している。加えて、発生率の少なかった保育所のビデオ記録の分析を通して、生活のリズム・流れやトラブルが発生しそうな際の保育士の事前の関わりが、トラブルの発生率の減少に影響を与えるのではないかと考察している。これらの結果から、単純な１人あたりの面積ではなく、活動する際のその時々の密度が、「かみつき」行動に影響を与える要因となっている可能性が指摘できる。

また、トラブル場面における子どもの方略に関する調査（倉盛，2013）では、1 歳児クラスでは「かみつき」や「ひっかく」といった身体的行動が最も多く生起し、2 歳児クラスになると身体的行動と言語的行動が同程度生起していることが報告されている。このような子どもの発達と行動との関係に関する丁寧な記録の蓄積は、「かみつき」行動の要因に関する理解を深め、「かみつき」行動が多発する発達の状態から、次の発達の状態への移行を促進する保育の方法を検討する上で重要なものとなると言えよう。

22～26 ヶ月頃に「かみつき」行動が多く見られることを踏まえると、月齢を考慮して小グループに分けた保育が「かみつき」行動を減少させる可能性もある。子ども同士の関わりを担保しつつ、過度な子ども同士の接触を制御し得る保育環境や、生活の流れの工夫について、具体的な提言ができるような研究を進めていくことが今後の課題である。

＜引用文献＞

① 西川 由紀子、射場 美恵子、かもがわ出版、「かみつき」をなくすために 保育をどう見直すか、2004 年。
② 中村 尋子、北野 哲也、藤岡 佐規子、八木 義雄、保育所児におけるかみつきの研究 3 海外における研究の動向、日本保育学会大会研究論文集、第 53 号、2000 年、108―109 頁。
③ 藤岡 佐紀子、八木 義雄、保育所児におけるかみつきの研究、日本保健福祉学会誌、第１巻第１号、1994 年、57―66 頁。
④ 森本 信也、田中 哲郎、大西 宏幸、志賀口 大輔、辻 健二、落合 陽子、三角 岳生、浅香 聡彦、堀 昌浩、吉岡 伸太郎、竹内 勝哉、永瀬 時久、高山 静子、細田 直哉、相沢 康夫、乳児保育におけるトラブルの要因とその解決に関する研究、保育科学研究、第 3 巻、2012 年、50―74 頁。
⑤ 倉盛 美穂子、乳児期における適応方略としての自己主張行動に関する研究、日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集、2013 年、319 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 中川 智之、１歳児クラスにおける「かみつき」行動の実態と要因の検討―或る保育所における１年間の記録の分析を通して―、川崎医療短期大学紀要、査読有、第 36 号、2016 年、53―59 頁。
https://kwtan.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=981&item_no=1&page_id=41&block_id=58

② 中川 智之、保育所保育におけるかみつき行動に関する調査、日本保育学会大会発表要旨集、査読無、第 70 号、2017 年、904 頁。

〔学会発表〕（計１件）

① 中川 智之、保育所保育におけるかみつき行動に関する調査、一般社団法人日本保育学会第 70 回大会、2017 年 5 月 20―21 日、川崎医療福祉大学（岡山県・倉敷市）。

６．研究組織

(1)研究代表者

中川　智之（NAKAGAWA, Tomoyuki）
川崎医療短期大学・医療保育科・准教授
研究者番号：50462049